

日本語速記法の成り立ちと類型

～過去の速記原本を可読化するための日本語速記史の研究～（二）

兼子次生¹, 菅原登², 下谷政弘³

第二編 日本における速記方式の成立と発展

I 日本語速記法の草創期 ～複画派の流れ～

1. はじめに

フランス国会速記者のナバル Albert Navarre は、世界の速記事情を調べた「ステノグラフィ」 Stenographie 1909年版に、ハースフェルト Dr. Hersfeld の情報として「日本の速記方式書の筆者、清澤與十は、大学南校教授の源(田鎖は源姓を名乗っていた)綱紀が1879年に速記を紹介した」と書いている。また、「最初の速記教本は、黒岩大と日置益(黒岩と日置による方式名を以下、黒岩式と呼ぶ)が1883年7月に出版したが、その速記法は成功しなかった」と、マインバーク Meinberg の話を伝えている。これが日本の速記が世界に紹介された記事の最も古い時期のものであった。

日本で速記法が登場する社会環境として、明治14年の政変が、田鎖、黒岩両式の開発競争の引き金役を果たした。国費1,400万円を投じた北海道開拓使(長官黒田清隆)の資産を無利息、30年賦、金額39万円で関西貿易商会(代表五代友厚)へ払い下げる案件が、天皇の勅裁を得て決定したと、新聞にスクープされた。事態收拾をはかった参議、伊藤博文が、直ちに大隈重信参議を政府から追放し、1890年に帝国議会を開設する詔勅を得て事態をおさめようとした。

欧米先進国への仲間入りを目指した日本は議会制を採り入れることが課題の一つであったが、降って湧いた国会開設の決定であった。しかし欧米の議会を見るに、発言記録の作成が課題であり、10年ほど前から日本語速記法の開発に取り組んでいた田鎖には朗報であった。彼の試みは、黒岩ら英語力を備えたジャーナリストに、当時知られていた。黒岩はのちに外交官となる日置益と組んで訳補を担当し、校訂を神田乃武とする執筆体制を整えて、リンズレー式の教本からの翻案版を出版する計画を申請していたが、1882年9月16日版權免許がおりた。田鎖は第一回の講習会を10月28日に開く旨の記事を時事新報に投稿し、黒岩式本免許報道の3日後に掲載された。

黒岩らの「傍聴筆記新法」は翌1883年7月に出版された。その2か月前の5月5日には、田鎖の第1回講習会の卒業証書授与式が行われた。一年半ほどたった1884年12月、田鎖が指導した符号(田鎖式初版)に近い内容の速記教本「傍聴筆記新法獨學全」が清澤與十によって上市された。ただ、清澤は第1回講習会の受講名簿に名前がなく、田鎖との関係が不明である。田鎖に関わる最初の単行本は丸山平次郎に口述して編集された1885年5月の「日本傍聴筆記法」であった。冒頭の記事の文脈から、清澤がハースフェルトに会って、田鎖の功績を話したと受け取れる。ただ、1879年に田鎖が速記を完成したのは事実ではなく、10年

がかりで開発する途中の情報を取り上げたことになる。

日本語の速記法は、田鎖式が若林珮蔵、林茂淳ら、優れた教え子に恵まれて実使用が推進されたのに比し、黒岩式は出版したにとどまり、実用化に至らなかった。これが、速記の成立を田鎖式、初の速記書出版を黒岩式とする理由の一つである。しかし、初期の速記理論は両式とも未完成であった。

本稿では日本語を対象として考案、改良された速記方式を取り上げ、伝来した速記文化が多様化しながら日本語へ適用される経過をみていくことにする。手書き速記法は符号式がまず実用化され、学びやすさを求めて文字の一部を用いる文字式へと広がっていった。符号式速記理論は、最初に受け入れられた幾何派方式が基礎符号を子音と母音の組み合わせる複画式として成立し、次いで、ア列、オ列で一画の線條で音節を表す基礎符号が登場する折衷式へと展開し、さらに一音節一画の単画式へと発達した。一方、遅れながらカタカナ、ひらがなの一部を用いる仮名速記が速記大衆化を進めてきたという歴史的な経過にほぼ沿ってこれから論を進めたい。

2. 田鎖式の講習会と黒岩らの速記書出版

英語子音	B	P	M	F	D	T	N	L	G	K	H	Z	TH	S	R	ZH	CH	SH
Pitman	\	\	∩	∩			∩	∩	—	—	∩)	()	∩	∩	/	∩
Graham	\	\	∩	∩			∩	∩	—	—	∩)	()	∩	∩	/	∩
Lindsley			∩)	—	—	∩	∩	\	\	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
田鎖式(行)			∩				∩	∩	—	—	∩)	()	∩	∩	/	∩
黒岩式(行)			∩				∩	∩	\	\	∩)	()	∩	∩	/	∩
仮名行父音	マ行			タ行 ナ行			カ行			サ行 ラ行								
英語母音	ă	ě	ī	Au	ŭ	Oo												
Pitman	·	·	·	—	—	—	ı A ě ă ő O Au ˆ ˘ ˙ ˚ ˛ ˜ ˝											
Lindsley	˘	˙	˚	˛	˜	˝												

【注】 リンズレー式母音 ˘ă, in ask, at. ˙ě, in ebb. ˚ı, in it; y in duty.
 ˘ă, in ask, at. ˛ŭ in us, fur hut. — őő, oo; in foot, u in full. ˙ě, in ebb.

図2-1 初期日本語速記法と母式の影響 兼子次生作成

田鎖が第1回傍聴筆記法講習会において使用した資料が残されていないため、受講した林茂淳が第1回講習会時の符号として「速記術大要全」1885.4.15に残した符号を田鎖式初版の基礎符号とする武部良明説をとることにする。

図 2-1 では、英文速記法の基礎符号を上側の英語子音欄に書いた符号で示し、日本語速記法の各行の基礎符号は仮名行父音欄にある各行の画線に母音符号を連続して生成することを示している。ここでは、ピットマン式は 1855 年版、グレイアム式は 1858 年版を用いている。田鎖式初版、黒岩式ともに、カ行を [K] , サ行を [S] , タ行を [T] , ナ行を [N] , ハ行を [F] , マ行を [M] , ラ行を [R] からそれぞれ生成している。図表では、簡便に見るため、日本語速記法の比較に用いられる 44 基礎符号を取り上げた。

西来路秀男によれば、手書き速記法には符号式、文字式があり、符号式速記法で用いる表音記号は符号と呼ぶ。また、文字式には文字由来の基礎符号があるが、符号式とともに基礎符号と呼ぶことにする。速記符号は創作者 Author のオリジナリティをほぼ忠実に反映すると見て、可能な限り方式書に掲載された筆跡をスキャンして用いることを原則とする。

田鎖式初版では、これら基礎符号を「記号」と呼び、総数は単記号 45、単記号に 1 点加えた複記号 140、合計 185 を設けて、これらを音種によって清音 50、濁音 20、拗音 70、鼻音 5、半濁音 5、濁拗音 25、鼻拗音 5、半濁拗音 5 に分類している。符号の大きさについて、田鎖式初版は清澤版によると、母音は 5 ミリ、父音は 10~12 ミリとされる。

図 2-2 に見るように、黒岩式では、母音の「アイウエオ」に短体記号を配当し、父音の「クツヌフムユルウ」に長体符号を配当して「正音記号」を 46 個つくり、ほかに「変音

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
黒岩式 A	u	n	-	c	i	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘
田鎖式初版 B	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘	˘
	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ	ワ	井	ウ	エ	ヲ
黒岩式 A	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘
田鎖式初版 B	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘	↘

図 2-2 田鎖式初版と黒岩式の基礎符号比較表 兼子次生成成

記号」と名づけて、濁音 20、清拗音 10、濁拗音 16、半濁拗音 3、半濁音 5 の記号を定めている。

黒岩版では符号の大きさを母音は父音の五分の一、1.5 ミリ程度、父音は 4.8 ミリ程とすると書いている。

速記の書き取りでは、発話音声聞きながら、基礎符号を連ねて単語、文節、定型句、文節、文を綴っていく。その筆記法は英文速記を参考にして、日本語に適するように工夫したが、図 2-3 に、林は初歩的なレベルの筆記法を比較して残している。

田鎖はグレイアム式英文速記法の体系を参照して音節文字を基盤とする日本語への適用を試みたが、基礎符号の生成法とその連続に苦慮した。結局は英文速記の音素を単位とす

る表音主義を採用し、幾何派の限られたストローク(線分符号)とサイン(フック, 短線)を日本語へ配分して、一期の複画派が成熟していくことになる。視覚記号資源の配分において田鎖式, 黒岩式ともに子音にストロークを充て, 母音にサインを用いる戦略を立てた。仮名に対応する音節符号を生成するために「ストローク+サインの構成原則」を定め, 子音に母音を従属する形式でつくるようにした。これは黒岩式も半円, 短線を用いていた点で共通性があるが, 田鎖は父音と呼ぶア列では母音サインなしとし, 子音と呼ぶ残りの行ではイ列に小円を充て, ウ, エ, オ 3 列には異方向の短線を続けてつくり出した。

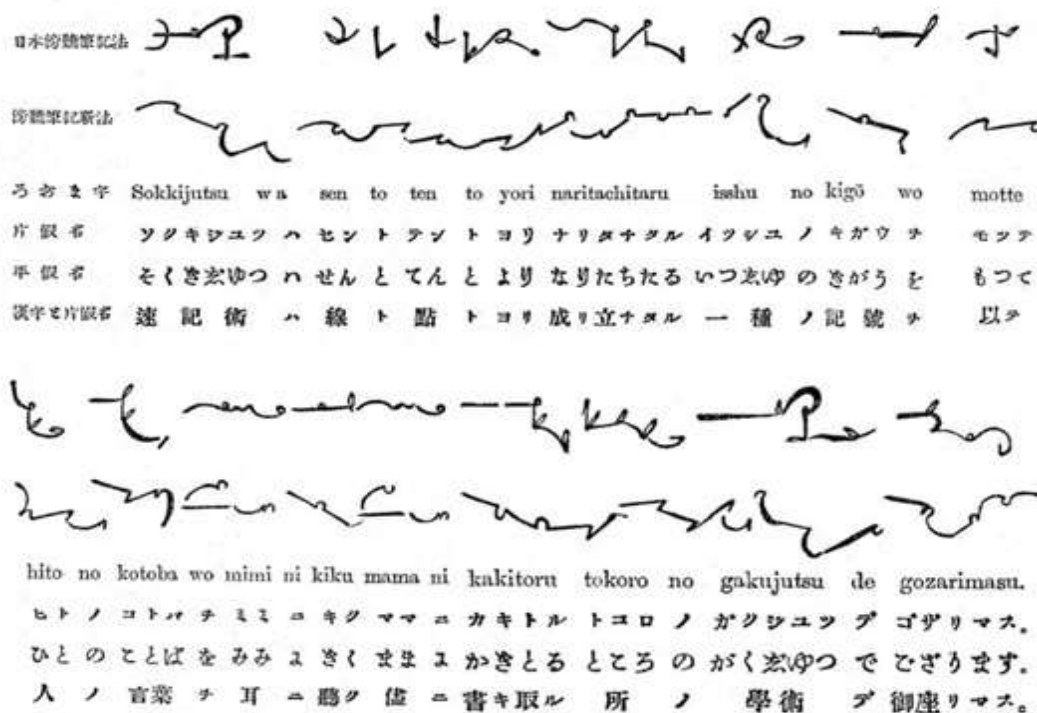


図 2-3 田鎖式初版と黒岩式の比較文例 「速記術大要」林茂淳 1885. 4. 15 p8-9

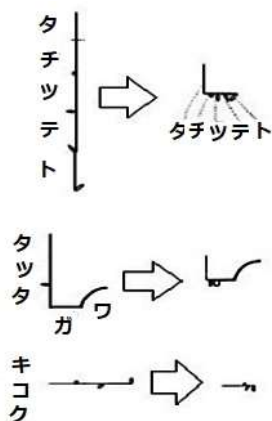


図2-4 同行縮字法の萌芽

図 2-2 に示した田鎖式初版の符号は独立形で, 言葉を筆記する際には続け書きするとし, その際, 直線の母音部分はひも書きする連続形とした。一方, 黒岩式はリンズレー式のように母音を半円で続け書きとした。田鎖が日本語を音どおり綴るときの符号の崩れ, 速書性の点で効果を挙げることが実証され, 結果として英文速記の綴り方は日本語の筆記には適さなかった。

林は, 両式の筆記符号を速記術大要全の 8~10 ページで紹介している。ただ, 符号について, 林の論評はない。

黒岩式と丸山版の速記理論を比較すると, 黒岩式がほぼ基礎

符号について述べるだけにとどまるのに対して、丸山版は日本語の特性を分析して緻密な符号の組み立てているほか、符号体系の理論において加点法を挙げるなど音声と記号両面にわたり進んだ研究を行っている。

図 2-4 のように、速記符号の研究面で、1885 年の丸山版は「疊呼」という名称で同行縮記法を挙げている。/カキクケコ/という文字列の場合、ア行疊字と称してカ行の短線にひも書きの母音をつける工夫である。また、加点助詞、動詞加点法を説明して、速記文法面で研究のあとが見られ、品詞を対象にして、名詞、形容詞、副詞の詞尾のテーマで言葉の尾音の省画をねらった筆記法を設けるなど、田鎖は日本語の特性を解析して談話発話をとらえるための符号研究を進めていた。

3. 速記書、清澤版と丸山版の比較

冒頭のハースフェルトの文に清澤の名を挙げたが、田鎖系で最も早く現れたと見られるのは清澤版であった。しかし、清澤と田鎖の関係が不詳のため、その検証が残されている。

田鎖口述と書かれて 1885 年に出版された丸山版と、清澤版を取り上げて、類似点、相違点を比較しながら、田鎖初版と清澤版の関係をうかがいたい。

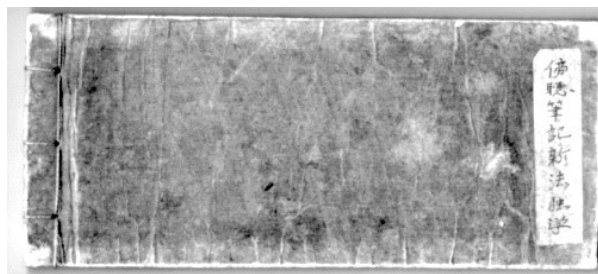


図 2-5 清澤版「傍聴筆記新法獨學全」表紙

清澤著「傍聴筆記新法獨學全」(図 2-5)は、1884 年 2 月出版された。序、凡例は日本語の書字習慣と逆の左起右進縦書きで、横書きの本文は左起右進である。装丁は伝統的な和本綴じで、横長のポケットブルなサイズであった。

一方、丸山著「ことば乃寫眞法」(図 2-6)は 1885 年 11 月に発行され、しゃれたネーミングと装丁を施して、カラフルな表紙デザインの書籍であった。書字方向は伝統的な日本の書籍のように縦書きで、当時海賊版が出てよく売れたと伝えられている。書中には源綱紀氏改良新法、大阪森玉林堂蔵版、英学独習会、駈々堂本店発兌所と表記されている。



図 2-6 丸山版「ことば乃寫眞法」表紙

清澤版の構成を見ると、符号源素、正音変音両符号、綴符法、略字法、数字を用いる事、句読法、長音を用ゆる事、同音連用の事、反音を用いる事、逼音を用ゆる事、綴符、後詞を用ゆる事、代名詞を用ゆる事、イロハ別け略符となっている。

丸山版では、記号の組織及び詳解、記号の綴り方、長く呼ぶ音の書き方、反て呼ぶ音の書き方、詰て呼ぶ音の書き方、疊て呼ぶ音の書き方及び用い方、詞尾の略記、語格の略記(てにをは)、数字の略記、略語、略文記号、加点法(語格及働詞)、節譜、句読法、感詞の

標, 記号連綴の例という構成になっている。

清澤版の基礎符号は, 日本語の旧仮名遣いを前提にして, 正円幾何派の符号を割り出す源素から, 母音, 父音, 両者から生成した子音と呼ぶ音節符号合計 130 種の説明がある。ただ, ○印を付したヤ行の [イ], [キ], ワ行の [イ], [于], [エ], [ヲ] の基礎符号は, 実際には用いないと書いている。

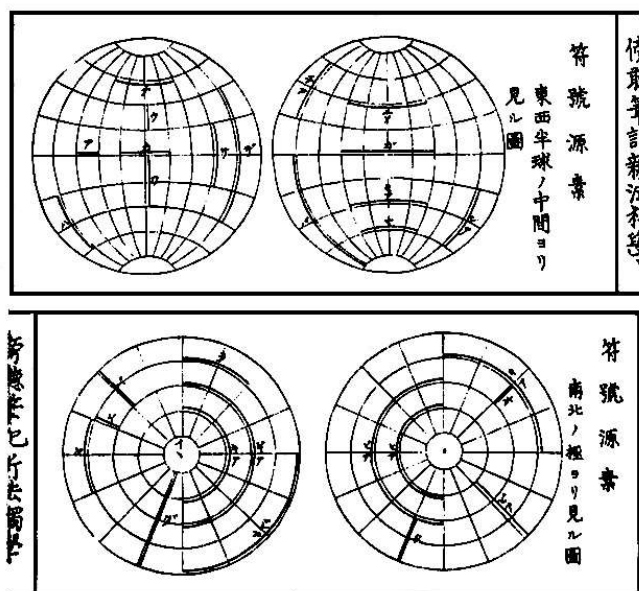


図2-7 幾何派の符号生成源図例

丸山版では, 田鎖がグレイアム式にならって生成した基礎符号を計 205 とし, 第一表に単音(清音, 濁音, 半濁音 75), 複音(清濁拗短音 70), 第二表に単音(拗短清音 20), 複音(特殊な拗短音, 40)を挙げている。ほかに, [ラ], [リ], [ル] 音に, 3 種の基礎符号を追加している。

それらのうち, 長音の表記法で, 清澤版は母音記号の書線を長くして示すとし, この扱いは丸山版でも同様で, 偶然と言えない近似である。

/ン/の撥音, /ッ/の促音の 3 種の表記法を説明している点でも似ている。撥音については, 清澤版は逼音と呼び符号尾部に点を打って示すのに対して, 丸山版は詰呼の名称で前字の中央部に後字の頭を交差させる方法をとる点で異なる。

清澤版は撥音について反音と呼び, 現代方式にも用いられる符号末尾を右上方向へはねる方法をとるのに比して, 丸山版では同名ながら「ナ」の符号を短くしたものをを用いている点異なるが, その後の多くの方式で右上方向へのはねが主流であることを考慮すると, 丸山版で一時的に試行された可能性がある。

両書に印刷された基礎符号は, 清澤版が独立体で, 一方丸山版は連綴体であるが, 図で見る限り同種の書体を用いている。両書の相違点は, 母音の [ア], [イ] とタ行, ヤ行, ワ行の 3 行, さらに母音 [ウ] については丸山版が水平短線を追加している点である。



符号群の切り方が実経験によって合理的に変化した

図 2-8 文節単位の筆記が早期から工夫された(丸山版「ことば乃寫眞法」62. p.)

ただ、林が書いたように、田鎖はよく基礎符号を変更したことを考えると、近似が多く、両式は田鎖式系であると断定できる。

単音節、複音節、言い回しを繰り返すことを疊音と呼ぶが、日本語速記法では必ずその扱い方を定めている。清澤版、丸山版とも類似の略し方を用意している。

日本語速記法においては、基礎符号を比較する際に五十音表の44音を用いるので、それに従って一画で書ける符号が占める比率(単画化率)を見ると、両式とも31%であった。

最初の速記では基礎符号を用いて、言葉を全音書きとめる基礎符号全記法であった。表現を換えれば、速記は表音主義に基づいて、仮名文字で書かれるようなものである。しかし、他人の発言をべた書きしたものを、音、言葉、文章の句切りを判断して読み解くことは、文字で扱う以上に難しい。反面、発言を速記符号で区切りなしで続け書きすることは不可能で、分かち書きが原則である。表音記号の速記符号をどのように書いて、どのように読むかに

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
田鎖丸山版	○	○	⊥	∖	/	—	—	→	→))))))						∪	∪	∪	∪	∪
清澤版	-	.		∖	/	—	—	→	→)))))	/	/	/	/	/	/	∪	∪	∪	∪	∪

	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ	ワ	井	ウ	エ	ヲ
田鎖丸山版	∖	∖	∖	∖	∪	∪	∪	∪	∪	∪	/	/	/	/	/	∪	∪	∪	∪	∪	∪	∪	∪	∪	∪
清澤版	∖	∖	∖	∖	∪	∪	∪	∪	∪	∪	(?)	?)	?)	?)	∪	∪	∪	∪	∪					

図 2-9 丸山版と清澤版の基礎符号 兼子次生作成

ついて黒岩や田鎖, 若林, 林らは研究した。

高速型の手書き速記では、筆記中にペン先が紙面から離れて次の符号の書き出しへ空中を移動する搬送線は一画をむだに費やすので、離筆の不利といって嫌われる。可能な限り一文を続けて筆記できることが望ましい。実用的なレベルについては、適度の音節数で、むだなく、書きやすい文字列の長さは、文節単位か、決まり文句の定型のものになりそうであ

る。また、縦下方向へ続く線、右下、左下、右上へ続く線分符号はズリと言って避ける必要があった。

英文速記では秘書型の用途のために句読点などの記述記号が用意されたので、清澤版でも句読法を設けた。発言の冒頭を示す印、一句、一語のまとまりを示す印、段落が変更される印を設けて、文の切れ目がわかるように配慮した。丸山版でも句読法があり、ほかにアクセント、プロミネンスなどを示す節譜、笑声などの感詞を設け、節譜では「上」「神」「紙」、「箸」「橋」「端」の違いを加点、ダッシュ、切線などで表記する例が図 2-10 のように示されていた。これらはのちに新聞社の電話速記でさらに厳しく整備され、一方国会など高速記録型の用途では微妙な箇所以外では施されないものとなった。

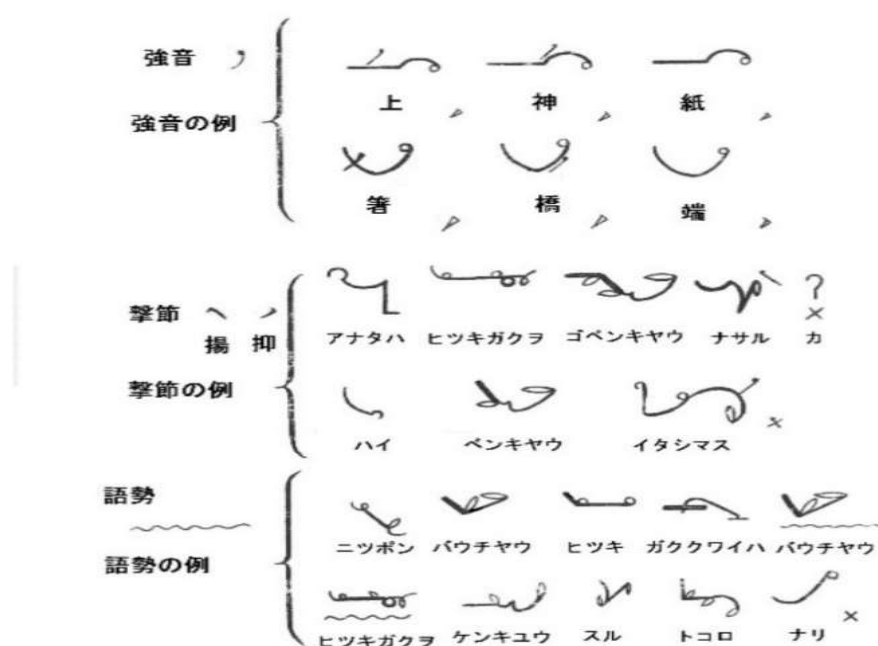


図 2-10 べた文を読みやすく区切る工夫例

「ことば乃寫眞法」1885. 11. 13 丸山平次郎 62p.

高速化を図るためには、速記符号群をなるべく大きな単位でまとめることが有利であると考える考え方もあり、衆議院式では運用論の中に単群原則をあげて、関連する言葉は「がある」「ことであります」「せんとするものであります」のような単位で能率を上げるために一群として筆記する符号へと発展していった。

速記符号を分かち書きする原則をとれば、文節の終わりに付く助詞や助動詞、動詞の活用形、形容詞などを簡単な符号にできる可能性が生まれる。

清澤版では後詞が現れ、[に][と][て][も]が基礎符号より簡単な符号に改められた。丸山版では一音助詞が 12、二音助詞が 28、合わせて 40 がつくられ、名詞の詞尾として [さ][み][げ] を用意し、「高さ」「高み」「高げ」のように運用させた。形容詞の詞尾として 6

種, 副詞の詞尾として3種が設けられている。

ところで, こうした簡略化方法の中で, 言葉の音数全部に対応しながら一部の頻出音をより簡単なサイン符号に置き換えて筆記する手法を縮記法と呼んだ。その場合, 別の符号で代用させて複数の音を表す方法を特定符号化や略記法と呼び, さらに音や言葉を省いて高速化を図る方法を省記法と呼んでいる。縮記法で表音的に速記する全記法の場合は, 音が省かれていないので, 第三者反訳の可能性が高く, 省記法や略記法で速記した場合, 判読できない場合がふえる。ただ, 簡略化法の呼称は方式, 年代, 個人によって異なっている。

一般に速記研究者は, 音と符号の両面で筆記負担を減ずる工夫を行う。C V単位 (Consonant + Vowel) の音節符号においてCを省いてVだけを書く方法や, 同じVを持つ複音節ではVを共有させる, つまり1個のVを前後のCで読ませる方法を考案している。こうしてCを共有する単語の省画のために, 同行縮字法への初期的な発想が見られる。

このような進化過程から見ると, 清澤版は, 速記が完成されない時期に, 啓発効果を担った書籍であったと断定できる。日本語の速記法としてひらめいた着想を解説し, 田鎖の人工文字体系の仕組みを紹介するにとどまり, 実際に使用するには十分でない。

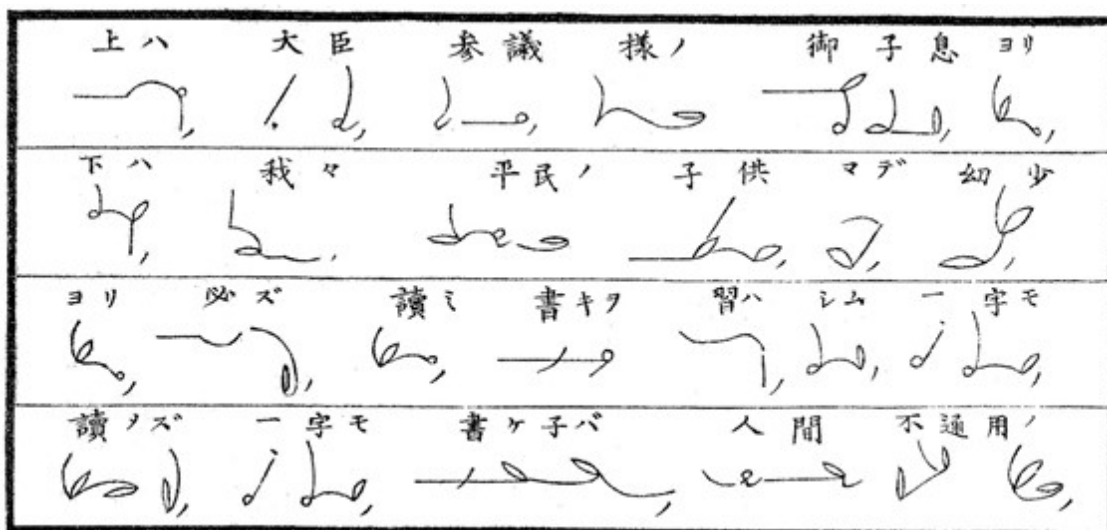


図2-11 早期の速記符号の連続状況「傍聴筆記新法獨學」清澤與十1884.2, p.8

例えば図 2-11 の連続文例の清澤版の中で速記符号は「大臣」, 「ご子息より」, 「幼少より」, 「読めず」, 「不通用の」, 「人物となるべし」が分ち書きされているので, 読み返す際に区切りが適切でなくて正しく読めないリスクのある。

速記符号の綴りは, 言葉, 意味, 文法的に適切に分ち書きされることが必要で, かつ与えられる速度条件に合わせて筆記できる画数, 書きやすさ, 判読しやすい符号を筆記できるように符号体系を編成することが求められる。清澤版は 1 つの符号群としてなめらかに綴るための便法を用意するまでには熟していない。

一方, 丸山版についても, 口述者は速記講習会を開いて3年経って, その間の研究に進歩があり, 日本語の特質を分析していることが加点法などうかがえる。また, 実用に供するた

めに、頻出語の略語を用意し、学習者の便を図っている。加點法の着想はのちの同行縮字法へつながるものであり、また述部の活用に対する規則的対応の工夫が行われている。

速記の運用では理論研究とフィールド体験での知見が相まって進められるものであり、この役割を若林珅蔵、林茂淳らが果たしたことが、若林の速記符号から理解できる。

4. 速記の概念の成立

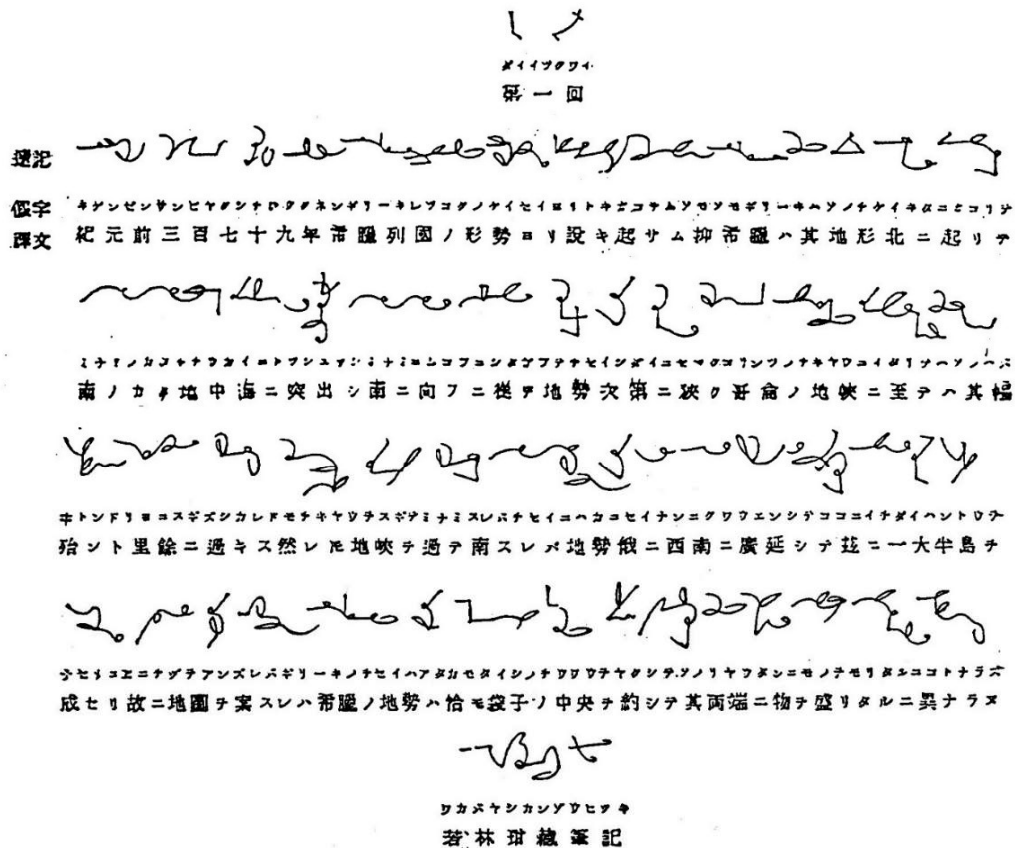


図 2-12 現存する最古の速記符号：矢野文雄口述，若林珅蔵速記「経国美談後編」

日本では速記と言えば手書き速記を意味してきた。その手書き速記にはイギリスの幾何派、ドイツの草書派、さらにアメリカではスピードライティングのようなラテン文字の筆記体を主に用いる文字式があった。速記をイギリスでは Shorthand と呼び、ドイツではそれにならって Kurzschrift と呼べるが Graphic shorthand とも呼んでむしろこのほうが通りがよい。後者は、「筆跡の」や「文字記号の」という筆記体派のイメージである。

それに比して、日本では速記術の記号や文字という呼び方が行われ、文字、記号、符号が用いられてきた。しかし、速記理論が進歩するにつれ、仮名文字を用いる速記は文字式速記という概念でまとめられ、文字として扱われない記号や符号を用いる速記は符号式速記と呼ばれてきた。これらを全体として手書き速記と呼ぶ。また、方式書には速記文字と表記す

る場合があるが、本稿では原則として速記符号という用語を使用することにする。

西来路は、高速度逐語型速記は符号式で初めて可能となるという信念を持ち、「符号」は記号より狭い一定社会に限り用いられるもので、記音行為(符号化)から最終目的である反訳行為(文字化)へ移る過程の媒介をする中間物(メディアム)であって、それ自身が最終目的である文字とは本質的に異なるものである、と説明している。一方、記号は文字、音声を含めて意味を持つもの全体を示すことがある反面で、狭い領域を示す用法があり、二極性を備えている。

一方、情報科学では信号列を短縮する技術として符号化 coding という術語がある。表音式から始まり一意性を前提とする符号化が電子機械速記法の速記符号において発達しており、冗長度を利用してデータ量を節減する目的において、coding は解読 decoding と対になって、手書き速記、機械速記共通の技術として重要である。

手書き速記方式の数は幾つあるかは、正確にわからないが、1950 年ごろの状況は田鎖式初版が生まれてから 80 数種があり、そのうち国会速記者など記録型の専門職を育てているのは、7,8 種にすぎないとする意見がある^{#1}。これから、速記方式史をまとめる際に、主要と思われる方式、あるいは太平洋戦争後の主要方式の発達を見ることにしたい。

5. 田鎖家本流の符号改変

1890 年の国会開設に備えて日本で初めて講習された速記法は、田鎖式初版であった。しかし、講習中に指導する速記符号が変更されることがあり、また使用された資料が残されていないため、正確にその速記理論を再現することはできない。受講した林が 3 年後の 1885 年 4 月 15 日に出版した「速記術大要」に掲載された速記符号と、最初の速記啓蒙書として上市された黒岩、日置訳補、神田校訂の「議事演説討論傍聴筆記新法」とを対比する形で明らかにされた基礎符号と文例が速記発表当時を知り得る資料である。

田鎖綱紀が基礎符号、速記文法、速記略字をどのような体系として整えたかについては、武部良明の研究があるので、それを用いて理解していきたい。^{#2} 田鎖は大学南校在学中の 1870 年に雑誌で初めてピットマン式を見たもののその後深く研究もしなかった。1872 年になりカーライル Robert G. Carlyle から与えられたグレイアム式の方式書で初歩を学び、日本語への翻案研究を始めた。グレイアム式は J. G. Graham が名乗った方式だが、基本的にはピットマン式系であったから、ピットマンに置き換えて読むことができる。

田鎖は初め、日本語に適応する記号をつくろうと試みて壁に当たった。図 2-13 で論を進めたい。そこで、グレイアム式を参考にして音を表す基礎符号と略字をつくって W 案の研究を始めた。最初の Wa 案では 60 余りの符号をつくって、母音は加点母音を用いた。ところが、英文速記をそのまま日本語へ移植することが難しいことがわかると、略語主義に方向転換し、Wb 案として 3,600 語の符号をつくり、さらに 90,000 語の符号に膨れ上がった Wc 案を編集した。

不幸にも、自宅が火災に遭ってW c 案の資料を焼失して略語戦略が挫折した。そこで、最初のW a 案に戻って再び表音主義のC a 案を立案し、1882年に100余りの単音符号、200余の複音符号とピットマン流の加点母音法を用いる改良案のC b 案を考案した。さらに、父音符号の追加、母音の連綴化を図る2,3の改良を施した改良C c 案をまとめた。このころが、1882年末から翌年春までの最初の講習会の符号体系であったと武部は見る。

腹案 明治5年 我邦音語に通用す可きの記号を製せんとす
Wa案 Graham氏の翻案、60有余の記号(加点母音)[焼失]
Wb案 Wa案に3,600有余の語を加う[焼失]
Wc案 Wa案に9万余の語を収集す[焼失]
Ca案 Wa案に略、同じ[田鎖式へ進む]
Cb案 明治15年100有余の単音記号、200有余の複音記号(加点母音)
Cc案 Cb案中2,3の改良(父音符号の増加、母音符号の連綴化)
Ta式 Cb案中連綴母音の連綴法を成就(母音符号を結ぶ)

図2-13 田鎖式初版成案に至る過程 武部良明 「速記概説」1948.5.3

ところで、一旦C b 案に戻ると、田鎖は、今度は連綴母音を袋結びとして書く方法(T a 式)を着想して書きやすさと学びやすさを高めようと図った。このT版以降を武部は田鎖式と呼ぶ。

その延長線上に翌1883年8月、大いに改良を加えて(T b 式)、つまり単記号48、複記号152、加点法(名詞の格働詞)及び時限を定めた。改良研究は続いて、1884年末には増補を図るとともに、拗音符号(T c 式)を採用した。1886年には、さらに大きな改良を行って、淡線符号だけとする「大日本記音学」(T d 式)をまとめ、1889年に入ると、「早書学」(T e 式)を著した経過について武部は、1943年国会の速記学研究会で口頭報告した。

このような過程で、改良は続いていった。田鎖綱紀は、終生速記研究の人であった。

6. 田鎖三代の基礎符号の足跡

田鎖式は、綱紀、一、源一の3代が改良を続けた。基礎符号は、綱紀が何度も変更したが、二代目、三代目になると、日本語の規範方式として速記理論体系の完成を目指した。

初版は、ピットマン系グレイアム式の基礎アルファベットを参照した。その影響を[K]⇒[カ]、[S]⇒[サ]、[T]⇒[タ]、[N]⇒[ナ]、[F]⇒[ハ]、[M]⇒[マ]、[R]⇒[ラ]の行に見る。

初期の日本語速記方式においては基礎音を、母音 Vowel とア列父音 “A” Column Syllabic Consonant、その他の母音列の子音 Syllable の3種類に分けた。図2-14のように、父音と呼ぶア列の基礎符号は一画の線条とし、父音と母音(ア行を除く)が結合してで

きる音節である子音 Syllable には父音の尾部に [イ列] , [ウ列] , [エ列] , [オ列] の母音を表す小型の直, 曲線をつけた。撥音は反音, 促音は逼音などと呼ばれ, 基礎符号の中には収められていない。

一は、「1941 年に六十年式を刊行した」と、1950 年発行の「最新田鎖式日本速記法詳釈」に記している。3 代目、源一はその後六十年式には一切触れず、「明治 23 年、大正 2 年と、綱紀自身の改革方式の出版、それを継いで田鎖一（綱紀の長男）が五十一年式（昭和 7 年）六十七年式（昭和 23 年）と新しく改革方式を出版して現在に至っております」と書いている。

1953 年（昭和 28 年）12 月 1 日発行「日本の速記」誌 12 月号収録の協会史料委員会編「速記関係書目」には、田鎖一、「六十年式日本速記法」A 4・56 頁、同人方, 昭 16-8 とあり、1941 年 8 月の六十年式の私家版発行と推定できる。ただ、源一は六十年式と六十七年式はあまり変わらないとしており、本稿では確認できる六十七年式を取り上げる。

速記符号を組織するためには、田鎖六十七年式の場合、0, 30, 60, 90, 120, 150 度の 6 通りの角度を用い、大形 10 ミリ, 中形 5 ミリ, 小形 4 ミリの 3 種の線分を与えている。

また速記符号の書き順に、「逆字」という書き方を設けて「平らに速く書き綴るために用いる」と、一は定義し、その説明を左から書くべき線を右から書いたり、上から書くべき線を下から書くための書法とする。若林が 1883 年、矢野に依頼されて速記した経国美談の符号には、「然れども」(ㇿ)の字末の助詞「も」に右から左へ進む逆字が見られるので、綱紀が始めた書き方が一にも継承されていたことになる。

この書法は西来路「衆議院式標準速記法原理」に、原則通りに素材符号を連続すると非常に書きにくい形になるとき、その部分を逆に書くことによって運筆上の困難さをなくす書き方として、図 2-15 の「名古屋」の例を挙げており、田鎖系の理論が継承されている。



図 2-15 衆議院単画符号における逆記法

一方、母音には父音の 3 分の 1 から 2 分の 1 程度の大きさの単線か半円を用い、父音は単線、そして子音は単独形で示す原則の田鎖式初版の場合、○イ形構造の [キ] , [シ] , [チ] , [ニ] は符号末から左上への短線を加え、○ウ形の [ク] , [ス] , [ヌ] , [フ] , [ム] , [ユ] , [ル] は直角に上がる短線を加え、[ツ] だけは短線を左横へ向かわせる形で生成している。

速記の基礎符号を表音的に綴るとき、(1)それ自体を独立して書く場合と、(2)その後ろに

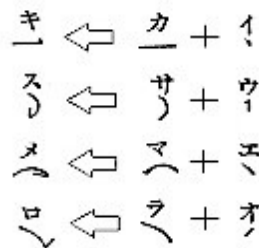


図 2-14 音節符号の生成法
田鎖式初版

母音や音節を伴う場合、(3)さらには音素、音節の後ろに付く場合と3種類の接続方法を持っている。速記符号は仮名文字のように音どおりに言葉を綴る方法が行われるが、句読点、段落を改める点は十分に考えられなかった。

しかし、仮名文字と同じように幾何図形の速記符号を続け書きすると、場合により符号が変形してしまうため、符号に一種の書き癖を加える工夫が課題であった。また、仮名のよう
に切れ目なしで符号を続け書きすることは書きにくく、読みにくいことが課題であった。

綱紀は、音節単位の速記符号がほかの母音や音節符号を伴う場合には、符号尾部の短線をひものように結んで書く連綴体を考えついた。これは綱紀の独創的な工夫である。実際に速くなると続け書きできない黒岩式に比べて、連綴母音と、そのひも書きがリズムカルで書き崩れを防ぐ運筆をもたらすことになり、田鎖式が成功するポイントであった。

それとともに、日本語では慣れない分かち書きを英語の速記符号を参考にして取り入れることが大切な課題であった。

	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね	の
A																									
B																									
C																									
D																									
E																									

	は	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	も	や	ゆ	よ	ら	り	る	れ	ろ	わ	ぬ	う	ゑ	を
A																							
B																							
C																							
D																							
E																							

A: 田鎖式初版 田鎖綱紀 1882
 B: 新田鎖式 田鎖綱紀 1893
 C: 田鎖51年式 田鎖一 1933
 D: 田鎖67年式 田鎖一 1949
 E: 田鎖76年式 田鎖源一 1958

兼子次生作成

図2-16 田鎖式3代基礎符号変遷表(田鎖綱紀、一、源一)

田鎖式における基礎符号の線分配当は、グレイナム式における音声と符号の対応関係にならっており、ナ行、マ行で安定している。図 2-16 に見るように、綱紀から一に世代交代する際にサ行、タ行、ハ行、ラ行が変更され、また線長を3種にふやした。源一は、一と同じ方向性を示したが、符号の尾部に付く2種類の楕円の一方を、半円を巻き込む形に変更して連綴をよりしやすく改善した。

田鎖式の1版から6版における単画化率の推移を、基礎符号44符号のうちの何パーセントを占めるかに限定して見ると、綱紀の初版(1882)は31%(14符号)、大日本早書学邦語速記術版の新田鎖式(1892)は31%(14符号)、一の五十一年式(1933)は54%(24符号)、六十七年式(1949)は61%(27符号)、源一の七十六年式(1958)は56%(25符号)であった。国会では同画倍音のため省画を至上目標に高速度化を追い続けたのに対して、汎用型の民間需要に対

して在野の田鎖式は折衷派で普遍化する道を取り、単画化へは進まなかった。

今日に伝わる「経国美談後編」巻末の田鎖式の速記符号は、第1回の講習会を受けたのち若林が使用する中で工夫した、現存最古の速記符号である。規範理論体系の高度化を追う綱紀と実践使用を目指した若林で、違った方向性が生じることになった。西来路は、速記は技術 Technology と技能 Technique の2つの柱があるとするが、知識としての速記法の技術体系を田鎖が研究し、その技術を使いこなすスキルを若林が完成したことになる。

図 2-12 の若林の文例から経国美談後編における速記理論の使用実態を見ると、速記の助詞(の, は, に, りては, ど, ども, ば, して, を, ず等)が単語に続け書きされている。また、音声への対応では促音, 豊音, 長音の筆記法が使用されている。ただ、数字が速記符号で書かれて筆記時間がかかるため、速度を稼ぐ上で課題であった。

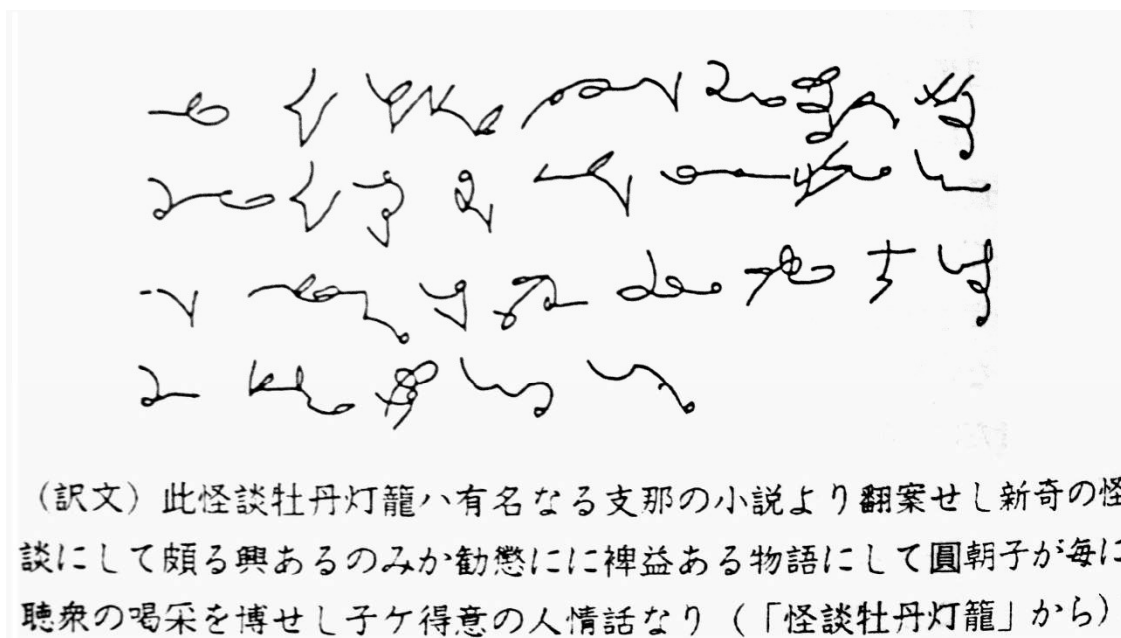
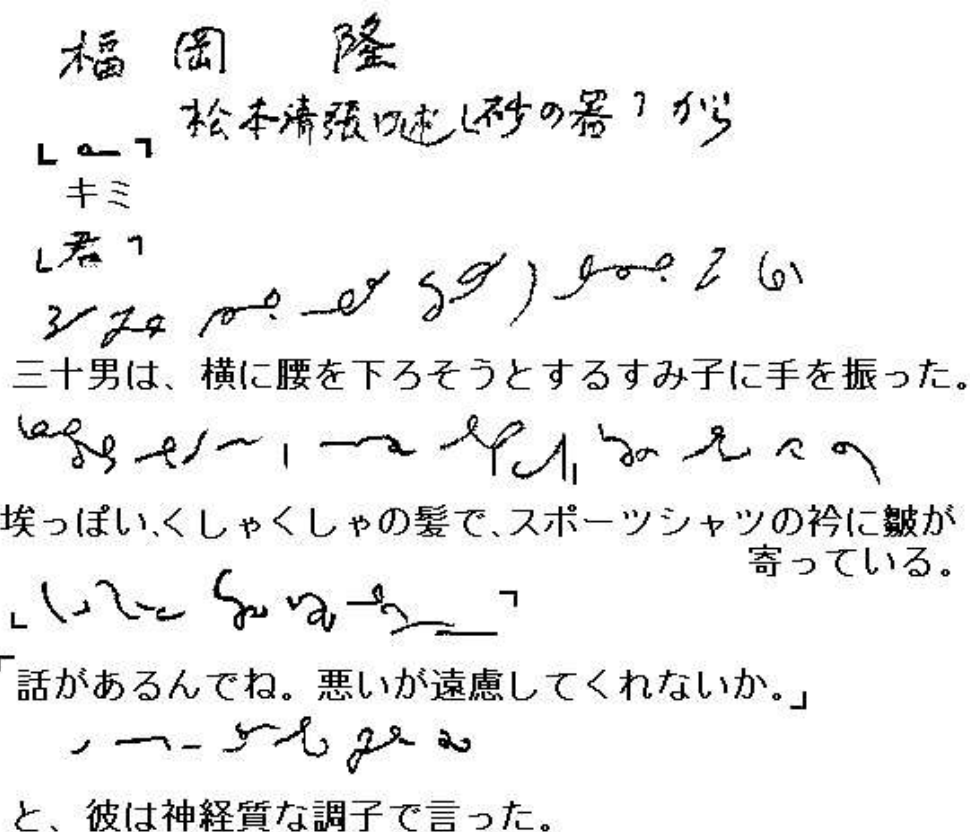


図 2-17 三遊亭圓朝「怪談牡丹燈籠」に掲載された若林珣蔵の速記符号

一方、1884年夏、若林が酒井昇造と協力して速記した三遊亭圓朝演述「怪談牡丹灯籠」の速記符号も残されている。図 2-17 の若林の速記符号には「有名なる」、「すこぶる」、「興ある」、「ある」における字末の「る」は、ひも結びを閉じずに直線の基礎符号を用いている点、「なり」も同様に基礎符号の「リ」を書いている点が、実用の運筆を求めた試みとしてうかがえる。さらに、「圓朝子」、「聴衆の」、「翻案せし」、「人情噺」に見られる複雑な複数円の使用は拗音や講談や落語を筆記する場合を意識して用意していた可能性もうかがえる。

のちの国会での田鎖式の利用や速記者の内部養成は、高速度で発言ありのままに書きとめるために田鎖式の符号研究が進められた。一方、田鎖家の速記普及活動は在野の速記者

養成に向かい、東京で集中化が進む雑誌、文芸出版分野の速記者を育成する流れをたどった。つまり図 2-18 にある松本清張の口述速記者、福岡隆のように、読ませる速記作品を目標とした、編集センスを備えた速記の反訳技術の方向へ進んでいった。



**図2-18 福岡隆(新田鎖)の速記文例
 (松本清張「砂の器」口述速記)**

綱紀の理論研究を継承して、一は、日本語速記法の規範方式としての理論体系の完成を目指し、「最新田鎖式日本速記法」(1950)において、方式の全体にわたり原則、法則を体系的に解説することにつとめた。すなわち速記字組織において符号線形の基準、大小、角度に続いて、左起右進横書きの書記方向にも及び、(1)前の音字の書き終わりから次の書き始めを続ける、(2)単語ごとに綴りを改める、(3)聞こえた音の通りに書く、(4)速記文は左から右へ書き進める、(5)鈍角接合を避けるために作角効果のある逆字を使うことがある——と基本を説明している。

また、(1)拗音はその行の基礎音字に30度の角度変化を与えた線形を用いること、(2)同行の拗音字は同一の線形による、(3)ア列は大形(1センチ)とし、(4)ウ列は字首を小さく曲げる(小マルカギ)、(5)オ列は字尾を小楕円で結ぶ、(6)エ列は字首及び字尾を小さく曲げる

——を原則とする符号生成法を定義している。このほか、濁音、長音、撥音、促音と、基礎音の表音符号の構成を説明している。

新田鎖式 田鎖一 田鎖速記研究所長

政府としては昭和30年度において14億3,000万ドルの輸入を予定しております。

1.

県財政の赤字克服策を中心に、その他教育、町村合併などの諸問題について若干の質問を試みんとするものであります。

2.

今年度の補正予算で計上する計画は立っていると書いていたじゃないですか。

3.

電力事情が著しく悪化したので生産量が低下したということでありましょうけれども、それは一時的な現象に過ぎないと思います。

4.

知事が真に人件費の増大を懸念して善処しようとする熱情を持っておられるのなら直ちにその対策を示されたい。

5.

図2-19 田鎖一の符号文例

鳥取県速記士会報2月号 1955.2.8. p17

次に、一は、縮記法において、言葉を音字のまま書き綴る第一の段階、時に応じて短縮の記法を用いる第二の段階、さらに場合によって部分的に筆記を省略する第三の省略的段階の

速記理論へと三段階に分けて、田鎖式日本速記法の理論体系を組み立てた。

これらの速記文法に加え、略字表を掲げて略字の大小の法則の効用として「簡単な線は余り多くないのに、言葉は数限りなくある。そこで、簡単な線形はできるだけ儉約して使わなければならぬ。大中小の別を立てればこれを三種の言葉に充てることができる」とし、さらに多様性を持たせるために筆記位置を上位（上段）と下位（下段）とする略法を説明している。

現に発せられる音声を合理的に視覚記号で固定する速記文法の中で、各方式で設定されているものに助字、助詞などがある。一は「助字には助動詞、助詞、または接尾語をこれに充てる」と定義し、速記符号は助字を連続した単位つまり文節ごとに筆記するとしている。第1類助字は語格、連続、命令、制限、疑問、指定、使役、受け身、打ち消し、推量、希望、形容、名詞、配当（体言、用言について「ずっと」、「ごとに」の配当の意味を表す）の14種を助字として符号を設定している。

また、第二類助字は、助動詞の過去、未来及び連続と尊敬助動詞として過去、未来、連続、尊敬の符号を設定している。続いて第三類助字として可能形、命令形、進行形の特殊な形を用意するなど、細部に及ぶ速記法の理論体系をまとめた。

一は、縮記を縮字と呼んで、縮字法においては、「同行縮字は同じ行の子音字が連続する場合にその第2音を短縮する手法である」と定義し、(1)同行縮字には①第二音が第1音と同行の単音、一音節の平音である場合、②第二音が第一音と同行の拗音で平音である場合、③第二音が第一音と同行の単音長音である場合、④第二音が第一音と同行の単音・長音である場合、⑤同行の音節が連続して第二音が撥音などの場合、⑥同行の音節が連続する場合など——の書き方の規則を定めた。そうして一音縮字と4種の二音縮字を設定した。一音縮字のサイン化（従属型微小記号化）対象には /イ/, /カ/, /ク/, /シ/, /シン/, /メ/, /メー/, /リ/, /ル/の音があり、中根式における字音語用のインツクキ法と同様の対象である。一方、早稲田式における二音文字に相当する二音縮字において、第一種に20種49、第二種に17種17個、第三種に11種、44個、さらに第四種に字音語熟語を形成する12種最短線を設定して、頻出音を簡単な符号とした。

源一によると、この67年式は一と共同執筆したとし、縮字法として(1)同行縮字、(2)一音縮字、(3)二音縮字の3種に分け、(2)は/イ/, /カ/, /ク/, /シ/, /シン/, /メ/, /メー/, /リ/, /ル/の音を対象とし、頻度が高い/イ/音には小円、/カ/音は中円、/ク/音には黒点を充てた。音節が連続する二音縮字は字音語に多く現れるので四種に分けて、符号の第一種は[カイ], [カク], [カツ]等49個、第二種は第二音が一通りしか変化しない[キヤク], [キョク], [ジツ]等17個、第三種はカとスが他音と前後する[カカ], [サカ], [カタ], [タス], [ラス]等44個、第四種は第二音を/カ/とする[ケッカ], [シュッカ], [ヒヤッカ], [リョッカ]等の12個に最短線を設定した。

源一は複画、折衷、単画へと、基礎符号が一画化へ進む中で、速記の五十音表(44)のうち25符号を単画化することで十分な実用性を得たとして、折衷派路線を貫いた。しかし、速記理

論体系は一が達成した領域にとどまり、むしろ広く普及を目指すために簡易化が進められた。例えば六十七年式の第三種二音縮字 11 種と、第三種二音縮字 11 種は除かれた。

略字では、品詞に応じて符号の大きさ、位置を決め、符号の形を構成音によって符号の胴体となる主形と、符号頭部と符号尾部に分けて決定すると説明した。符号の大きさでは 1 センチの大型を名詞、動詞、形容詞に使用し、2.5 ミリの小型は副詞、接続詞と決め、書記位置では上位は上 5 ミリに書き、詞、副詞、下位はそのままの線上で名詞、動詞、代名詞、接続詞に適用する。規範とされる速記符号はピットマン式系の小型のものであった。

速記符号の形を定義する「形状」理論では、胴体（主形）が（1）母音で始まるものはそのままか、次に現れる子音符号の行に与えられた線形（思う、失う、選ぶ等）を用い、（2）子音で始まるものはその子音の線形（掛かる、産業、話す等）を用いることと決めた。

符号の綴り方を見ると、字首は（1）母音で始まる場合、/ア/の場合頭部に大円（例 [明らか]、[新しい]）、/イ/の場合小円（例 [今]、[著しい]）、/ウ/、/エ/、/オ/の場合、それらの母音をつける（例 [失う]、[選ぶ]、[思う]）——とし、（2）子音で始まるものは、各行同一の線形が基礎になっているので、/ア/、/イ/、/ウ/、/エ/、/オ/の各列に分けて、①ア列の子音の場合、字首に特別な形はつけない（例 [掛かる]、[話す]）、②イ列の子音の場合頭部に小円をつける（例 [君]、[示す]、[人]）、③ウ、エ列の子音の場合、頭部を小さく曲げる（例 [少し]、[生産]）、黒点（[組合]、[願う]）、④オ列の子音の場合、頭部を曲げる（例 [答う]、[望む]）こととした。

尾部つまり字尾は字首ほど厳格に区別せず、頻度の高い/キ/・/クム/、/シイ/、/シ・ス/、/ル/で終わるものだけを規定し他は自由にする。（1）語尾が/キ/・/ク/・/ム/の場合、黒点（例 [新しき]、[全く]、[望む]）、（2）/シイ/の場合、小円（例 [新しい]、[著しい]）、（3）/シ/・/ス/で終わる場合、わなで結ぶ（例 [著し]、[示す]）、（4）/ル/で終わる場合、カギ型をつける（例 [掛かる]、[承る]、[考える]）。

そのほか、一般略語約 800 を決めた。従語的な助詞、助動詞、接尾語は小形を原則とし、4 種に分けて、（1）第 1 類（助詞、助動詞、接尾語）：助詞、語格助字、接続助字、命令助字、制限助字、疑問感嘆助字。助動詞、指定助字、使役助字、受身助字、打消助字、推量助字、希望助字、接尾語、形容助字、名詞助字、配当助字（2）第二類（時及び尊敬の助動詞）尊敬助字（3）第三類（特殊形、助動詞）可能形、命令形、進行形、（4）第四類（助詞、助動詞、動詞等の複合形）合成助字——と、性質及び組織の仕方から 22 種に分類した。助字の原形は約 450 種指定した。原形の変化を助字第二類尊敬助字の場合で見ると、動詞 [思う] に続いて、[マス]、[マサル]、[マシテ]、[マセン]、[マセヌ]、[マシタ]、[マシタラ]、[マシタロウ]、[マセナンダ]、[マセナンダラ]、[マセナンダロウ]、[マシヨウ]、[マスマイ]、[マシタッタ]、[マシタウタラ]、[マシタッタロウ]、[マセナンダッタ]、[マセナンダッタラ]、[マセナンダッタロウ] が接続されて多様である点を解説した。

六十七年式ではほかに、畳句略記法（肯定畳句、反語畳句記法）、数字、数詞字記法、

さらに標識として文章標、校正標、情景標を整えた。

前著に続いて田鎖式七十六年式は源一がまとめ 1958 年 4 月に発行された。源一は 1959 年 11 月に「速記の完全独習」、さらに 1981 年に「速記 6 カ月コース」を発行し、速記講座を開いて後進の育成に当たっていたが、田鎖式本流は 1996 年 2 月 25 日の源一の死をもって、速記理論研究と普及活動を終えた。

7. 国会における速記方式研究

日本で速記誕生時、国会の速記録を作成することが、速記理論研究の第一の使命とされた。

「我が国の国会は、明治 23 年の第 1 回帝国議会以来、完全な速記録を備えております。日本語に対する速記術が誕生して以来、わずか 10 年足らずして議事記録に速記法を採用したことは世界の議会史上例を見ないことであります。議事録の作成に当たる者は、言うまでもなく速記者です。本会議あるいは委員会が開かれる場合には、いかにそれが難しい内容を持つ会議であろうとも、またいかにそれが輻輳しても、正確な記録をとり、議院の要請に迅速に応えることが速記者に課せられた大きな責務であります。議事録を作成するに当たっては、優秀な速記者が必要であり、事務局としては他からこれを容易に求め得ないだけに、みずからの責任において絶えず養成しなければなりません。衆議院速記者養成所はこのような趣旨、目的をもって設立されて以来、80 年間にわたって、その使命を果たしてきております。」（衆議院速記者養成所八十年史序、谷福丸事務総長）このような高邁な使命を感じて国会速記者は活動してきた。

田鎖式と言っても、「未完成の速記法は、創始者田鎖綱紀の発表になるものそのままの符号だけを指しているのではない。創案者自身が幾度か改訂を加えているし、またこれを習得した者においてもおのおの自己の好むところに従って更改を企てるから、基礎符号においてその配分線が垂直に、あるいは斜めに、また符号を構成する母音符が上に、下に、種々その形を異にするものであっても、それらは総括してこれを田鎖式と称しているのである」と西来路は書き残している。

田鎖の講習会を終えて符号の改良と後進の育成に当たった者は、若林、酒井、林、新井田次郎らであった。第一議会からのち、速記技能の研究では、日常の業務上で用いた書き方、略語などを収集して速記者グループの中で共有する体制をとったり、符号を管理する担当を決めたりするなど、さまざまな活動が行われてきた。初期には速記者の供給源は限られていたので、国会は採用試験を行って主に若林門下や酒井門下の後進の中から、速記体制を整えた。しかし、民間市場において報道関係に電話速記が採用されて、速記人材の需給関係が逼迫してくると、国会内部で速記者を養成、確保する必要が出てきた。そうして 1918 年 5 月 15 日、貴族院と衆議院に養成機関がそれぞれ設けられ、現場から教授者を選んで貴族院速記練習所、衆議院速記者養成所の内部養成が始まった。教授たちによって複画の田鎖式から、次第に折衷、そして単画への進化を目指して両機関の活動が行われることとなった。

8. 衆議院式標準速記法の完成

基礎符号(1)	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
若林珺蔵 1895	∪ / ı \ ー	— 』 』 』 』)))))
榊原清 ^{*1} 1912	∪ ˆ ı \ /	— 』 』 』 』)))))
荒浪市平 1899	∪ 〇 ı \ /	— 』 』 』 』)))))
熊崎健一郎 1903	∪ ˆ ı \ /	— 』 』 』 』)))))
丹羽瀧男 1907	∪ ˆ ı \ /	— 』 』 』 』)))))
衆議院一期 1918	∪ ˆ ı \ /	— 』 』 』 』)))))
貴族院一期 1918	∪ 〇 ı \ /	— 』 』 』 』)))))
基礎符号(2)	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
若林珺蔵 1895	』 』 』 』	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
榊原清 ^{*1} 1912	』 』 』 』	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
荒浪市平 1899	』 』 』 』	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
熊崎健一郎 1903	』 』 』 』	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
丹羽瀧男 1907	』 』 』 』	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
衆議院一期 1918	』 』 』 』	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
貴族院一期 1918	』 』 』 』	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
基礎符号(3)	マミムメモ	ヤユヨラリ	ルレロワ
若林珺蔵 1895	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
榊原清 ^{*1} 1912	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
荒浪市平 1899	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
熊崎健一郎 1903	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
丹羽瀧男 1907	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
衆議院一期 1918	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪
貴族院一期 1918	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪	∪ ∪ ∪ ∪ ∪

図 2-20 ある時期における国会速記者の方式系統の実態

衆議院においては若林門下が主になって方式改良と後進育成を担った。画期的なことに、教授者が異動で交代しても、指導する符号を一定させる原則をとった。そうすることによって、符号改良の成果を維持、前進させることができると判断したからである。

育成の任には、若林が育てた佃與次郎、友野茂三郎、尾張捨吉郎、荒浪市平らが当たってきた。彼らの中で、佃は長谷川篤、森田章三、鈴木庄平らを、友野は西来路、野口芳夫、手嶋史雄らを、尾張は水野為三郎を、さらに荒浪は水野春之助を育てた。

教授陣の中で、友野は自分の符号を教えずに、その当時衆議院速記課内で最も進歩した符号を用いていた長谷川の符号を指導したこと、また長谷川の高弟の石川隆一は自分の符号を教えずに、1939年の23期生から、友野の弟子である西来路が考案した単画符号を制式符号として指導したことが発展につながった。

此海軍補充ノ計画タルヤ



図 2-21 衆・友野茂三郎のダイナミックな直筆

衆議院式標準速記法は、複画から折衷、そして到達目標の単画への移行を遂げたが、2006年末に廃止され、速記者の養成を終えた。衆議院式は西来路の期分けによると、初期複画時代、中期折衷時代、そして単画時代と3期に分けられる。1918年速記者養成所が開設された第1期は田鎖式そのものであった。

衆議院式の標準符号の変遷を見ると、1918年から2006年までの間に、一度も変わらなかったのは[カ]、[サ]、[タ]、[ナ]、[ハ]、[ナ]、[マ]、[ヤ]、[ラ]、[オ]の10符号であった。西来路は、「諸先輩の功績を記念する意味で、もともと単画であった符号はそのままこれを踏襲することにした」と書いている。1回変更されたのは[ア]、[ワ]の2符号、2回変更されたのは[エ]、[キ]、[シ]、[ト]、[ニ]、[ヒ]、[ワ]の7符号、3回変更は[イ]、[ウ]、[ケ]、[コ]、[ソ]、[チ]、[テ]、[ヘ]、[ホ]、[ミ]、[メ]、[モ]、[リ]の13符号、4回変更は[ク]、[セ]、[ツ]、[ヌ]、[フ]、[ル]、[ロ]の7符号、5回変更は[ス]、[ネ]、[ム]、[ヨ]、[レ]の5符号、6回変更は[ユ]の1符号であった。基礎符号の改良は、同画倍音つまり一音節符号の多音節化を追う一環であった。

実は養成所が開設された初期に、若林の門下、友野は、同門の佃、長谷川の流れを汲む石川らの符号を採り入れて盛んに田鎖式に改良を加えていた。その流れを継承して森田は基礎符号の単画化を最重点に置きながら拗音、略符号の整備を急いだ。しかし、森田は1933年の第17期生から改良符号の教授を開始し、1935年には新符号を公にしたものの、森田が教職を離れると一転して旧式に逆戻りした。

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	
(1)	1期 1918	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(2)	2期 1919	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(3)	9期 1925	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(4)	13期 1929	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(5)	14期 1930	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(6)	19期 1935	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(7)	20期 1936	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	
(8)	21期 1937	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(9)	23期 1939	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(10)	26期 1942	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(11)	28期 1944	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(12)	45期 1961	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(13)	46期 1962	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(14)	82期 2000	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

		ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	ユ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ	ワ			
(1)	1期 1918	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(2)	2期 1919	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(3)	9期 1925	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(4)	13期 1929	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(5)	14期 1930	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(6)	19期 1935	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(7)	20期 1936	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

		ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	ユ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ	ワ			
(8)	21期 1937	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(9)	23期 1939	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(10)	26期 1942	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(11)	28期 1944	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(12)	45期 1961	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(13)	46期 1962	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(14)	82期 2000	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(1) 1期 1918 (2) 2期 1919 (3) 9期 1925 (4) 13期 1929 (5) 14期 1930 (6) 19期 1935 (7) 20期 1936
 (8) 21期 1937 (9) 23期 1939 (10) 26期 1942 (11) 28期 1944 (12) 45期 1961 (13) 46期 1962 (14) 82期 2000

図 2-22 衆議院式の符号変遷表 兼子次生成成

注：衆議院養成所80年史口絵 符号の変遷(1)(2)を画像処理して作成した

還元問題ガ八釜シカッタノハ必ズシモ一年限り



図 2-23 石川隆一の速記符号文例

このころ、折衷派の台頭が盛んになり、さらに民間が考案した単画派の中根式が登場して強い刺激を与える環境にあった。複画派にも、折衷派から単画派への改良を急ぐ機運が盛り上がり、速記課内でも「速記文字の根本的研究と標準符号の確立」を掲げて研究活動が始まった。それは 1939 年の第 23 期から制定される新標準符号の指導へつながる速記研究であった。

標準符号制定委員会では、新折衷派をベースにして取り組むこととし、単画符号のア列、イ列は従来の複画符号体系時のままに据え置いて、新たに複画符号のウエオ 3 列に単画化のねらいがつけられた。また、字音語だけでなく、和語用にも尾音に [ン]，[イ]，[キ]，[ク]，[チ]，[ツ]，[ル] が付く複音符号が整えられた。加えて速記の性能を高めるために略語生成の原則を確立し、それらの体系化を図った。

モノヲ掲ゲテ居ツタノデアリマス、非募債主義ナルモノガ



図 2-24 森田章三の速記符号文例

単画化へ助走する過程で、森田は 1933 年の第 17 期生からア行、ア列、ウ列、[エ]，[セ]，[テ]，[ソ]，[ト]，[ノ] を単画化した折衷式を指導していた。図 2-24 は森田の符号である。

ゴールの単画標準符号は、西来路が引き継いで開発を進めた。まず、西来路は 1939 年の第 23 期に [キ]，[シ]，[チ]，[ユ]，[ヒ]，[ミ]，[リ] を除いて単画化を図ったが、続けて五十音符号全部の単画化を完了し、1942 年の第 26 期生から完全な単画符号を指導した。このとき衆議院式は、綱紀の「複画田鎖式」から「衆議院式単画標準速記法」へ飛躍した。

研究熱が高まった衆議院速記課では 1940 年、内部に速記学研究会を設けて、速記本質論、速記思想史、速記史、速記符号学、速記技術発達史などのテーマで速記学の研究を始めた。西来路のもとに、外部から武部が加わって「日本速記方式発達史」を刊行するなど、意気盛んであった。手書き速記全盛時代、速記者養成所を専門学校へと進め、さらには大学への

移行を目標とする構想があったが、残念ながら結実しなかった。

衆議院式標準速記法について、西来路はその全理論体系を以下のように残している。

1. 簡約（単画・短縮化）原理 単記法 摘記法

速記の符号はどこまで簡単化し得るか。全速記人の本能的欲求とでもいうべき単画化の理論は、素材としての素音（50音）、複音（二音節）、連音（三音節）、の各符号はもちろん、進んで四音節以上の単語、単群（文節）、連群（句）まで、使用率の高いものはすべて単画化しようとするもの。

同時に同じ符号でも一定の比率で全部を小さく書けば、それだけ運筆速度は速くなるわけだから、高速度になるほど意識的に符号全体を短小化して空筆（虚線）を含む動線の短縮を企図する理論

2. 省略（摘要・少線化）原理 段記法 接記法

全部の符号を単画化することはできないから、次善の策としてできるだけ画線を少なくするため、思い出すヒントになる音だけ符号化しておいて、あとは書かないでも読めるように頭脳の方を訓練しようとする理論

3. 類推（推理・関係化）原理 着記法 交記法

論理的なつながりの「連度」を利用して、前後の符号と関連付けることによって簡約原理、省略原理で締めくくれない符号の線量を減少しようとする無形化理論

4. 相通（同形・異読化）原理 略記法 寓記法

形態として有限な符号を無限に変化する言語活動にいかに対応させるか。同形の符号を幾通りに読み分け得るか。類推の原理を援用することによって符号操作、運用を高度化する研究

5. 卓立（異形・特異化）原理 同記法 縮記法

間違えやすい符号間の異同弁（識別要素）を確定し、周囲の符号から際立たせる研究

6. 統合（流動・容易化）原理 換記法 全記法

符号の流れ全体を流線化し、容易化して個性的に集約する研究

これらの原理を実現するための符号筆記、縮省略つまり符号化方法として、①単記法、②摘記法、③段記法、④接記法、⑤着記法、⑥交記法、⑦略記法、⑧寓記法、⑨同記法、⑩縮記法、⑪換記法、⑫全記法—を挙げた。

西来路は①単記法は、音韻を表す素材符号の形態とは関係なく、使用率の高い言葉を単画で特記する方法、②摘記法は、思い出すヒントになる音だけ独立して少線化する方法、③段記法は、下段（過去）、中段（現在）、上段（未来）と、筆記位置を利用して同形の符号の語尾をツタ、ツッテ、ロウと読み分け、同時にこの原則を他にも転用する方法、④接記法は、前の符号に接近させて書くことによって線量を減少させる方法、⑤着記法は、前の符号のある部分（a:中央部、b:末端近く、c:末端）に次に来る言葉の中のある音の符号を付着させることによってその他のものを無形化する方法、⑥交記法は、前符号に、次に来る言葉の後音または尾音の符号を交差させることによって他の音の符号を

無形化し、少線化する方法、⑦略記法は、思い出すヒントになるものだけ符号化して、あとの類推できるものはすべて一定の記号をつけて書かないようにする方法、⑧寓記法は、寓意的な書き方という意味で、ワが小さいから「昭和」、ホが小さいから「保障」、下にラだから「シタラ」、上にニだから「ウエニ」等とする方法、⑨同記法は、同じ形で一面の書きやすい符号を幾通りに読みかえ得るかということを決める方法、⑩縮記法は、合成、複合して具体的に運用するとき、素材符号として個々に定められた本来の記法原則では長大になるものを特定のものに限り縮小して書いてもよいという方法、⑪換記法は、当然考えられるある書き方よりも、さらに簡単に書ける別の方法があるときは、そのより簡単な書き方に転換してもよいという方法、⑫全記法は、素材符号を一つ一つ音の順に原則通り接続していく方法——と説明されている。

9. 貴族院式・参議院式の完成

1918年5月15日、第一次世界大戦後の好景気に伴い、新聞通信社など産業界の人手不足から議会速記者の充員に困難が感じられたため、貴族院に貴族院速記練習所が置かれた。これによりみずから速記者を養成して、将来の増員に対応することになったと、日本速記年表に記されている。

実は、田鎖綱紀の日本語速記術は、弟子たちによって実用化されて以来、速記技能の訓練は主に、林、若林、佃、安田、荒浪、酒井、長谷川らの速記塾において行われていた。その中で、若林、佃、安田3塾の系統を引く人材がこの後継者養成の任に当たった。

貴族院速記練習所が設置されると、第一期の速記担当教官には、速記技手の伊藤新太郎が当たるとともに、同門の川守田武一、安田、丹羽滝男、小宮八十二、月江雋英が貴族院で使用されている基礎符号、略語を収集したのち、複面の田鎖式速記法を整理して指導した。授業の講演は、書記官長の柳田国男が行い、第1回の試験を長谷川赳夫速記課長が朗読した。

戦前、戦後の我が国速記界を代表する立場で活躍した、貴族院速記練習所第一期生の荒井庚子郎の記憶によると、授業では同行・同列縮綴法、[エル]、[ケル]、[セル]、[テル]、[エテ]、[セテ]、[ネテ]の書き方、1,000ほどの略符号、例えば、[アリマス]、[アリマシタ]、[デアル]、[テ]・[ニ]・[ヲ]・[ハ]を学習したり、練習生も、[内閣総理大臣]、[大蔵大臣]といった頻度の高い言葉をすばやく筆記できる略語を工夫したと伝えられている。

伊藤の後任は、同門の佃門下の薦野孝郷が速記符号を指導、第3期は木下蔭高、第4期は月江、第5期は木下が、それぞれ自分が書いている速記符号を教えた。その後、佃の流れの安田やその門下、山田到の系統と、月江の系統の畑田明、久野安一、一方木下門下の入内島修一の系統が貴族院、参議院の速記法改良と速記者養成の柱となった。

参議院において本会議、委員会の発言記録を作成する速記者たちは日夜、速記符号を工夫、改良した。それらは各人それぞれに変化していった。現場で各速記者が獲得した優秀な符

号を共有する気風のもと、また指導者は優れた符号を学びやすく解説、体系化し、間違いの少ない符号をカリキュラムに取り入れる雰囲気があった。

符号の改良を重ねる中で、有志が集まって 1923 年 7 月に安田宅で貴族院速記技手会附属速記研究会の前身となる研究会を発会した。一番の関心事である単画への改良に関する議論では、結局複画を土台にした折衷でいくことに意見が一致したという。こうした自発的な方式改良研究活動は 9 年間ほど続いたが、貴族院の場合、自分たちの符号をよい符号にしたいという動機が中心で、当時、統一符号をつくる機運はなかった。

貴族院速記練習所、参議院速記者養成所では田鎖に始まる複画、折衷、単画の定義を次のように決めている。すなわち「複画式」とは、基本符号五十音のうち、ア列、ア行のみ直線または曲線で、その他はすべて小半円または小弓形を尾端につけて表し、「折衷式」はイ列の [キ] 以下あるいはオ列の [ノ] 以下のみ小半円を尾端につけて表し、「単画式」は五十音全部を直線または曲線で表すとする。

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ
複画式	∪	∩	∩	∩	∩	—	—	—	—	—	∩	∩	∩	∩	∩
折衷式	∩	∩	∩	∩	∩	—	—	—	—	∩	∩	∩	∩	∩	∩
単画式	∪	∩	∩	∩	∩	—	—	—	—	∩	∩	∩	∩	∩	∩
統一式	∩	∩	∩	∩	∩	—	—	—	—	∩	∩	∩	∩	∩	∩
	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
複画式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
折衷式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
単画式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
統一式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
	マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	ユ	ヨ	ラ	リ	ル	レ	ロ	ワ	
複画式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
折衷式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
単画式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩
統一式	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩	∩

図 2-25 田鎖式から貴族院式・参議院式への基礎符号の変遷

注：貴族院速記練習所参議院速記者養成所 80 年史 442p.

統一式は折衷式（統一）として収録された符号である。 兼子次生成成

そうして、複画符号は貴族院速記練習所第 1 期生(1918. 5-1920. 3)から参議院速記者養成所第 3 期生(1948. 4-1950. 3)までに指導された。その後、より高速度の発言に対応させるために、参議院第 4 期生から折衷符号と単画符号が指導されることになる。図 2-25 は貴族院式・参議院式の基礎符号である。

貴族院、参議院における速記学研究成果として、1937 年には佃門下の安田勝蔵は字音語の調査解析成果を「日本速記法上に於ける漢字音と其の略字法則の研究」として刊行した。

字音語の音列の規則性を速記理論に用いる手法は、林甕臣やガントレット式、さらに中根式において中心的な字音語縮記法として取り上げられていた。それに対して先行する田鎖式系統においては、字音語の筆記法は、貴族院式でも、二音縮字による対応が行われてきた。安田は上記研究書において中根の縮記法による提案に関して、歴史的仮名遣いのレベルで当時の日本語における音列の法則を解説した。

1938年、山田は貴族院式初めての教科書として、師の安田と共著で「日本語速記法」を刊行した。その中で、山田は体系的に理論を構築し、文法に則った省略法を解説している。それは本流田鎖式系統の理論研究の成果の一つであった。

山田は「日本語速記法」の序に「旧来の如き便宜主義的な速記法では現代人をして首肯せしめざるのみならず、速写能力も行詰り、益々速記術の欠陥を暴露するのみである」と悲壮とも受け取れる決意を示していた。畑田は、山田が貴族院式、参議院式の省略法を理論的、体系的に構築し、文法に則った省略体系を整えたと賞賛する一方、「山田は“行う“をぎょうにんべんの下部分を取り去った符号をつくったり、中根式がとった訓音換記法やインツクキ法を採り入れたりするなど、寓記法も好んで用いた」と、実用的な方式体系を目指したとする。

[単画符号への挑戦]

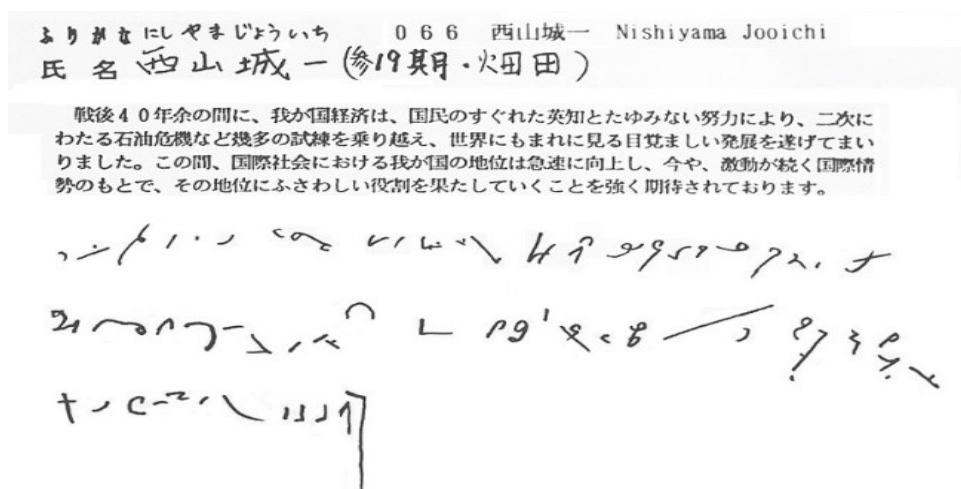


図 2-26 参議院 19 期生の単画符号の文例

複画から始まり折衷を指導して、単画符号を完成した畑田は、野口英彦、田口綾夫一井東里美を育てながら、酒井の流れを汲む高野章三、さらには久野の流れを汲む紺谷赫へも単画式教授陣の輪を広げた。

「1画の価値が1音と1字、ものによってはせいぜい3音。これを半分の画数で書けたら速記は楽だなと思った。すなわち単画だ。だから初めから折衷は眼中になかった」と後年語る畑田は、「字音の2音1画を3音、4音へと切り込まなければいけない、1画でも切り込もう」と単画理論の構築に突き進んだ。貴族院にも採用され始めた中根式の速記者が書く

速記符号を見ながら、「考えてもいないような節約ができる書き方も可能だ。略字の形をとらない略字がつくれる」と畑田は参議院単画符号の可能性に期待した。反面、「ただ、用言は非常に簡単にできるが。だが、体言ができない。用言・体言の比例をとるために体言の略字がどうしても必要になる」と単画符号にも課題があることを見抜いていた。

図 2-26 の参議院速記者養成所第 19 期生の符号は、畑田が最後に指導した西山城一の単画符号である。

また、紺谷は、単画符号を用いれば「社会保障」を 1 画で書け、「財政投融资」を 2 画で書く。6, 7 音の一画化を可能にしたいくなる」と単画符号に魅せられていた。

木下の流れを受けた入内島は、複画を伝え続け、豊島信夫－筒井園子、山岸正文と廣田桂助－町田睦美を育てた。

符号研究に当たって、山田は参議院の速記録から日本語の広がり、組み合わせ形式、頻度の統計を克明にとるとともに、音列と符号の最適な配分を計算してきた。速記発表七十周年記念誌「速記・研究と回顧」には、その手法で畑田は単画符号開発のために行った基礎調査、筆記実験データをもとに、単画符号の姿を示した。

1946 年春、占領下で衆議院選挙が行われ、続いて召集された第 90 回帝国議会で憲法改正がテーマになったが、それらの審議時間が長時間にわたった。発言速記録の作成需要が急増して速記者不足が深刻になり、そのため参議院速記者養成所では練習生（二年生）がかり出されて委員会に出ることがふえた。また衆議院においても学習途中の練習生に口述して反訳を手伝わせる復演方式がとられるようになった。貴族院においては参議院になってから、議場における発言速度が平均的に速くなり、速記法の性能を改善する必要性が高まっていった。復演のほかに、テープレコーダーを補助に用いることなども行われて、速記を取り巻く環境が次第に変わっていった。

参議院式における単画速記符号の研究、指導の歴史を振り返ってみよう。

荒井が貴族院速記練習所で学んだ貴族院複画符号は図 2-25 の上段で示されるものであったが、直弟子たちが現場で磨き上げた速記符号は各人それぞれ変化していった。図 2-27 は、山田、畑田らから指導を受けた烏田聰（貴族院第 24 期生、入所 1942. 10-卒業 1944. 9）が書いた複画符号であり、折衷符号の直前のものである。24 期生は 3 カ年の就業期限が短縮されて 1944 年 9 月に二学年第三学期試験を受けたのは 7 名のうち烏田と島田一郎 2 名だけで、島田は間もなく出征して戦病死した。翌 1945 年早春には東京大空襲があり、ほとんど速記の練習ができなかったという。

ある意味で、符号式において、速記とは、聴覚言語記号を聞き取りながら音韻の同定と意味を理解し、それを視覚言語記号の一種である速記符号を用いて符号化 Coding して固定し、そののち視覚言語記号の文字へ転写 transcript する活動を実行する中間言語メディアである。

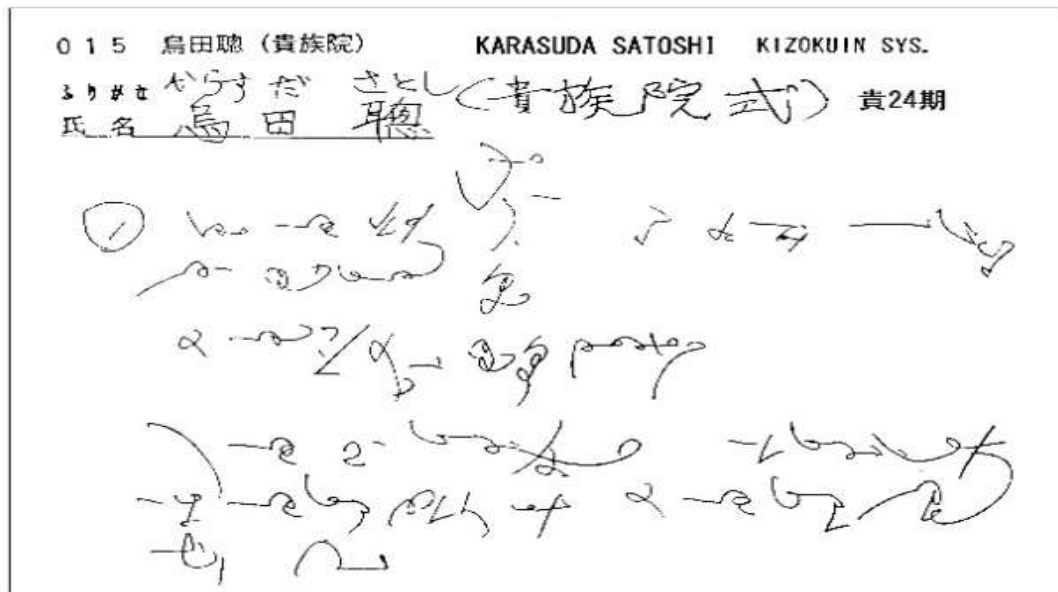


図 2-27 最終期の貴族院複画符号の文例

符号式速記法の体系は、言語音を固定するための基礎符号群と、単音、音列群を簡単な形で符号化する縮記法、あるいは単語単位に言葉をあらわす表語法、さらに意味に対応する形象群を用いる略記法、冗長性を利用して最大限に符号を省く省記法で構成されている。

折衷符号研究に当たって、山田は参議院の速記録から日本語の音韻、表記の頻度、多様性、組み合わせ形式等のデータを克明にとるとともに、音列と符号の最適な配分を試算した。

一方、畑田は単画符号開発のために行った基礎調査、筆記実験データをもとに、単画符号のモデルを速記発表七十周年記念誌「速記・研究と回顧」に提起した。こうした研究データの分析に基づいて、聴覚言語と視覚記号体系の両面から速記文法を検証する姿勢は参議院における田鎖式系統の理論研究の流れであった。

山田と久野は参議院式折衷符号の確立を目指して第 5 期から指導を開始し、第 6 期までの担当には高野省三が加わり、折衷符号への転換を進めた。

一方、畑田は、長年取り組んできた参議院式単画符号に成功の見通しをつけると、1949 年の第 4 期に入内島所長の承諾を得て満を持して複画式から切りかえた。切りかえは大胆に進められる。5、6 期を挟んで、1952 年の第 7 期に畑田所長が A 組を担当して再開、高野が担当したが、この期には、のちに日本速記協会主催の 1954 年度高速度競技会で第一席の成績を上げる阿波郁子が単画参議院式を学んでいた。

こうして将来、10 分間 3,500 字前後の卒業試験が可能となるめどはついた。ただ、符号研究においては、簡単になった速記符号に起因する誤訳をいかに防ぐかという課題、さらには略符号の体系を整えるという課題が出てきた。その後、畑田の成果を受け継いで、紺谷赫が単画符号研究と指導を続けることになる。

参議院式 山田到 参議院速記者養成所講師

2) 10月15日 21時

政府としては昭和30年度において14億万ドルの輸入を予定しております。

赤字…克服策入

県財政の赤字克服策を中心に、その他

教育、町村合併などの諸問題について若干の質問を試みんとするものであります。

29 → 21 時

今年度の補正予算で計上する計画は立っておりと言っていたじゃないですか。

電力事情が著しく悪化したので生産量が低下したということでありましょけれども、それは一時的な現象に過ぎないと思います。

知事が真に人件費の増大を懸念して善処しようとする熱情を持っておられるのなら直ちにその対策を示されたい。

4. 10 → 10月15日 21時

知事が真に人件費の増大を懸念して善処しようとする熱情を持っておられるのなら直ちにその対策を示されたい。

図 2-28 参議院式折衷符号の完成者、山田到の符号文例

ちなみに第7期, B組では山田が新たな複画式の符号を教授した。それはかなり単画式を取り入れたもので、もはや純粹の複画式は完全に影をひそめていた。つまり折衷式の完成形であった。図 2-28 は山田が書いた符号である。

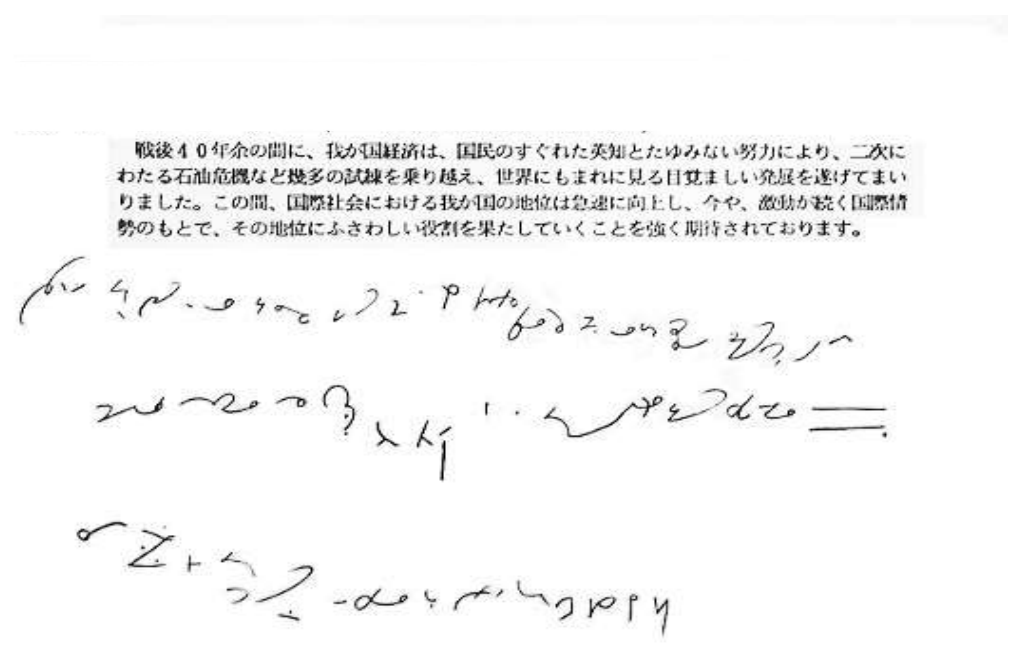


図 2-29 参議院式新折衷式の符号文例

山田は、参議院式新折衷派の特徴として、その構成を品詞別にして特に動詞、助動詞等

の活用言に主力を注いだとする。例えば動詞では、「暖」「厳」「穩」「健」「豊」などの語幹に台字と呼ぶ速記符号群を設定し、「な」「なり」などが続くときに定型的に対応させる規則や、動詞に接続する「られ」「らる」などが定型的に接続する場合の規則的な書き方を設けたことが特徴であると説明している。

山田は戦前から戦後にかけて複画から折衷に至る基礎符号の改良研究と速記者の養成に貢献したが、その中で、福原諄治－佐々木実、須和恭男－高橋正喜・田中仁、牛木定男－佐藤俊記、津脇尚志－永田満、高柳郁朗らが使命を担った。1986年、第41期からは新折衷式に統一された。参議院式において高速度の発言に対応する逐語型の速記理論は完成されていた。図2-29の41期の符号は、高橋の指導によるものであった。

複画から折衷派を確立、指導した山田は15期の長期にわたり養成、訓練に当たり、片や複画から単画符号を開発した畑田は7期の間、後進を指導した中心的な研究者であった。参議院からは、各国議会制度の研究を初め憲法研究で知られる前田英昭、速記史の豊島信夫らを輩出し、速記の研究時代の花を咲かせた。ただ、2006年、養成所が閉鎖され、参議院式速記法の訓練は終了した。

図2-30は、貴族院式、参議院式の文例の変遷である。現実にかかれる速記符号が一貫して継承されている。

	まず第一に	総理にお伺い したいのは	国家に奉仕 する者の	綱紀の肅正につ いてであります
複画式				
折衷式				
単画式				
折衷式 (統一)				

図2-30-(1) 貴族院式、参議院式の符号文例

貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号) 出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史 1999年3月1日発行 兼子次生整理

	松平大使は	国連軍に 対して	日本も	派兵する ことは	国連協力の	根本をなすもの だと言いました	そして
複							
折							
単							
統							

図2-30-(2) 貴族院式、参議院式の符号文例

貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号)

出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史 1999年3月1日発行 兼子次生整理

	一部の者からか っさいをあびて	たいへん	気をよくしたらしい のでありますが	たち まち	冷たい
複					
折					
単					
統					

図2-30-(3) 貴族院式、参議院式の符号文例

貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号) 出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史 1999年3月1日発行 兼子次生整理

	国民の感情の反撃に驚きまして	問題の	記者会見の発言を	撤回すると声明して	任地へ	去っていくよう であります
複						
折						
単						
統						

図2-30-(4) 貴族院式、参議院式の符号文例

貴族院速記練習所、参議院速記者養成所で指導した符号変遷(複画式は貴族院1期生から参議院3期生まで参議院4期生から折衷式、単画式を指導、参議院41期生から折衷式による統一符号)
 出典：貴族院速記練習所 参議院速記者養成所八十年史 1999年3月1日発行 兼子次生整理

[まとめ]

国会の速記採用は田鎖式を3つの系統へ発達させた。国会の主流となったのは、若林の門下であり、その中でも佃は有能な後継者を供給して貢献した。衆議院において佃系の長谷川は石川、また森田は単画化へ向かう流れをつくったほか、若門の友野は西来路を育て、ほかにも同門の荒浪市平は国会には入らなかったが、方式の進歩面などで貢献した。

また、貴族院においても若門の木下蔭高が速記者養成に従事するとともに、佃門下の月江雋英が折衷派の山田、久野安一、単画派の畑田を育てて方式改良に寄与した。

在野では田鎖綱紀の門下からは1888年、藤木顕道が濃淡の区別を廃止した完全複画方式を公表したことがある。そのほか、新田鎖式から複画派の野崎仁太郎が1906年、サ行、タ行などの基本画線の変更を加えた野崎式の改良案を出し、一方丹羽滝男は1907年、複画系で問題となっていた母音サインの崩れを防ぐために基礎符号を改良した。新しく折衷派の熊崎式が登場したのは、折衷派の民間方式が盛んに試みられていく。